

これはアイデンティティの悪用だ 独善的政権運営の背後にあるもの

インド・ビジネス・センター代表 島田卓



**強引なヒンドゥー国家づくり
イスラム教徒は納得しない**

モディ首相を背後で操るといわるインド人民党(BJP)総裁で内務大臣を兼務するアマット・シヤーが、モディの伝記本「一匹狼の伝記(Karnayodha Granth)」を上梓し、新年一月七日、出版記念会を開いた。その席上でシヤーは「今までの政府が恐怖のあまり手を付けられなかった数々の問題をモディは果敢にやってのけた」と持ち上げた。

それは①インドで唯一イスラム教徒が多数を占める印最北部ジャム・カシミール州の自治権を暫定的に認めた法律規程を削除し直轄領にしたこと、②首都デリー準州に隣接しインドで最大の面積と人

口を有するウッタール・プラデシュ州の聖地アヨディアにおけるヒンドゥーとムスリムとの長年にわたる流血の争いに、最高裁がヒンドゥー寄りの判決を下したこと、そして極め付けが③イスラム教徒以外の不法移民に国籍を与える改正国籍法を与党BJPが少数派であるものの上院で通したこと、などを挙げている。同時にシヤーは、「我々政府は三悪霊、融和(弱腰)政策、カースト(維持)主義と(ネルー・ガンディー)王朝政治を排除した」と強調した。

こうしたモディの一派の最近の言動は、インテリや常識派には「独裁者のリーダーシップ」と映っている。だが、非暴力・不服従運動で独立を勝ち取ったガンディーでも多様なインドの統一を成

し得なかった。強権と映るうが、独裁者と罵られようが、それをやつのけるためのモディの究極の戦略が、インドにおけるイスラムの力を削ぐことなのかもしれない。しかし、一般国民にとっては、減速する景気と雇用喪失、悪化の一途をたどる都市部での大気汚染問題。これまでのインド経済の拡大の恩恵に浴せなかった農村部の悲惨な現状が、鬱積していた不満を爆発させ、各地でのデモに繋がっている。

それでもモディの関心の第一は、ヒンドゥー国家への道のため与党BJPの地盤を固め、独裁者の地位を確固たるものとしようとしていることだ。ただ、現地で起こっていることを見る限り、インド国民全般、特にインドに住むイスラ

ム教徒に受け入れられるものでないことだけは確かだ。

まず、カシミール問題。以前にも書いた通り、その目的は同地で弱体化BJPの政治基盤強化のためだ。一九四七年の独立時に暫定的措置として導入された長期ベンディング問題の解決とは言うものの、同地に居住するイスラム教徒の基本的人権を考慮したなどと言えるものではない。

次に、アヨディア問題だが、同地には、イスラム王朝であるムガル帝国時代の一五二八年、初代皇帝バーブルによってモスクが建立されたとされており、ヒンドゥー寺院などはなかった。その後、モスクに隣接する地にヒンドゥー寺院建立の許可申請が地裁に出されたが、却下されている。そして

独立後二年を過ぎた一九四九年二月、摩訶不思議なことに、インド三大神の一人、ヴィシュヌ(維持)の化身で、アヨディアで生まれたとされるラーマ神の神像(Mo)が当該モスク内で発見される。インドでは神の化身としてのラーマへの信仰は篤く、マハトマ・ガンディーは死に際「ヘー・ラーム(ラーマの神よ)」と言ったらしい。

だが、その像は狂信的ヒンドゥー教徒が持ち込んだものとされ、当局は一九八六年までモスクを閉鎖した。その後、長年にわたりムスリムとヒンドゥーの間で、聖地アヨディアの占有争奪戦が繰り返されてきた。一九九〇年には当時のBJP総裁L・K・アドバニがモスクの破壊と新寺院の建立を煽りたてた。大規模な暴動発生を懸念した当時の首相、V・P・シンはアドバニを逮捕したが、逆に過激派を刺激しアヨディアでの衝突が激化、三〇人以上の死者と数百人の負傷者を出している。

そして、昨年十一月、最高裁か

ら出された判決はアヨディアにヒンドゥー寺院の建立を認め、見返りとしてムスリムには近隣地に五行(約二万平方メートル)の土地を与え、モスク建設を許可するというものであった。

モディは即座に最高裁の決定に従い、インド国民にも自制を呼びかけた。現地有力紙誌はこぞ「長年の懸案事項の解決でヒンドゥー・ムスリムの無用な抗争が避けられ、我々は前進できる」と、最高裁の判決を歓迎した。しかし、事実を反した判決を受け入れざるをえない一億を超えるインド在住のイスラム教徒には耐えがたい屈辱だった。

**インド全体で大抗議活動
なぜ人々は争うのか、そのわけは**

そして真意を測りかねるのが国籍法改正、否、改悪だ。改正内容はアフガニスタン、バングラデシュ、パキスタンからの不法移民に對しインド国籍を与えないというのだが、その中にはインドで二番目に大きな人口を抱えるイスラム

教徒は含まれていない。そのため、信仰の自由や政教分離を保証した憲法違反であるとの論争を巻き起こし、イスラム教徒のみならず、他宗教派をも巻き込んだインド全土での大抗議活動につながっている。

インド最大州ウッタール・プラデシュ州だけでも二〇人を超す死者を出し、安倍首相は昨年一二月一五―一七日に予定していたインド訪問を延期した。特にアッサムや西ベンガル州ではバングラデシュからの不法移民が多いことから現地に居住する人々の不安を煽っている。

昨年一二月九日、BJPと党が過半数を占める下院で通過した同改正法案は、一二月一日、上院でも可決され、翌二二日に大統領が署名し成立している。本来なら上院では通らないはずの法案なのである。なぜなら、上院の定員二四五議席のうち、BJPと協力政党議員の総数は九六議席であり過半数(一二三議席)には二七議席不足している。だが、上院投票

結果は賛成一二五、反対一〇五、BJPが可決に必要な野党議員を取り込み、欠席(不投票)に誘導した結果である。特に、今年州議会選挙がある西ベンガル州やアッサム州(上院議員数は各々一六と七)を取り込んだのだろう。

西ベンガル州のママタ・バナルジー首相(草の根会議派)は反BJPを明言しているが、連合を組む野党第一党国民会議派と前西ベンガル州与党インド共産党(マルクス主義)が、自身を追い落とそうとしていると疑念を抱き、そこをモディがうまく利用した。今のインドは憲法の本質を守る義務を蔑ろにし、国民不在の政治駆け引きに明け暮れている。

あれほど期待をもって登場したモディ政権。レバノン生まれでパリ在住の作家、アミン・マアルーフは「普遍的な概念を持つアイデンティティが、ただ一つの帰属に限る思考と結びつく排除の道具になってしまふ」という。無理なアイデンティティづくりが人を殺すことにもなるのだ。(敬称略)